会長賞

小学生の部

「心のトビラを開けてくれた母のことば」

横浜市立三保小学校
6年　梅村（うめむら）　あゆさん

私は小学三年生の時不登校になりました。音に過敏になったり、大勢の人と行動するのが苦手になったり、身体のリズムが崩れてしまったり色んな原因が重なったからです。

殆んどの時間を家の中で過ごすストレスでお母さんに当たったり酷いことを言ったり、折角作ってくれたご飯を捨てたりしました。

でもお母さんは一度も「学校へ行きなさい」と言ったことはありません。逆に毎日学校へ行って担任の先生と相談したり、家庭訪問を重ねてもらったり、放課後に少しずつ通ったりと私が安心して学校へ戻れるように沢山の工夫をしてくれました。

再び学校へ通えるようになったのは五年生に進級した頃です。お母さんは少しでも私の不安を減らせるようにと、教育サポーターや図書ボランティア、スクールゾーンの見守りボランティア等色んなことに参加して学校でも私と会える時間を増やしてくれています。

お母さんは精神障害者です。今までに沢山の差別や偏見を受けてきたと話してくれたことがあります。それに体調が悪くて一日中寝ている日も多く「頭が痛い、手がこわばって痛い、歩くと気持ちが悪くなる」と私に伝えてくる日もあります。だからきっと私が学校に通えなかった時凄く辛かったと思うのに、毎日笑顔でいつも温かいご飯を作ってくれました。今なら素直に「ありがとう」と伝えることが出来ると思います。

私は四月から六年生になりました。まだまだ不安でいっぱいですが「大丈夫だよ。辛くなったらいつでも迎えに行ってあげるからね」と言ってくれたお母さんの言葉をお守りに毎日笑顔で通っています。

不登校の日々を過ごしてきた私がその時間の中で学んだことは、「自分と誰かを比べたり、見た目で判断したり、やる前なのに諦めるのではなく、どんな時も自分らしく笑顔でいる」ということです。

大きな夢も出来ました。それは私の側にいつも居て温かいご飯を作ってくれたお母さんのように悲しんだり、辛くなっている人を多く笑顔にしてあげられる料理人になることです。頑張って叶えたいです。

そして私は来年の春小学校を卒業します。その時胸を張ってお母さんに「一生けんめい自分らしく笑顔で頑張りました。ずっと側に居て見守ってくれて有難うございます。」と言えるように残りの日々を過ごしたいです。

前が見えず暗かった私の心のトビラを開けてくれたのは、優しくて温かなお母さんの手と、私のことを信じてかけ続けてくれた幸せを運んでくれる大好きなお母さんの「ことば」でした。